



信友会会報

2010年10月

<<9月例会より>>

本年度の信友会は、教会における信友会のあり方を問うことにし、「教会とは」、「信仰とは」など信仰の原点を探っています。9月例会はその一環として、下記のテーマにより礼拝を共に守っております。船本弘毅先生（関西学院大学名誉教授、神学）に聖書の成立等を解きあかしていただきました。

信友会 9月例会

「聖書をどう読むか～その成立・背景・内容・意味・を考える～」

船本 弘毅 先生

大学のキリスト教学や聖書の講義は、150分の授業を30週で行うのが普通です。それを1時間で語るのは大変困難な課題です。岩波辞典では、聖書は、キリスト教の神聖な聖典、バイブル、旧約と新約からなると書いています。一般に信仰を語る堅い書物であり、威儀を正して読むというイメージがあるかも知れません。

しかし、聖書は、一流の学者が集まって世界中の信徒を、信仰に導く書物として編集したものではなく、ユダヤのごく一般の人々が今の自分達が信じた信仰を書いたもの、イエスに出会って感動して書いた書物が残って集積されたもので、2千年後にこの阿佐ヶ谷教会で読まれるなどということは想定していませんでした。バイブルはギリシャ語のピブリオンから来ており、パピルスの巻物に書いた書物を意味しました。ただの本を意味する語が聖書に特定されたのは、「本の中の本」という意味があったこととなります。聖書は現在、2,426の国語や言語に翻訳されています。世界中の殆どの人々が、自分の言葉で聖書を読むことができます。昨年の北京オリンピックの参加国は、202カ国でこれまで最大でしたがこれに比べても驚くべき数です。「聖書」とは旧新約聖書を指す言葉ですが、その発行数は、世界で年間、2千5百万冊、日本では21万冊発行されています。新約、旧約など分冊されたものを加えると、世界で年間3億9千3百万冊が、日本では230万冊が発行されています。クリスチャンが、人口の1%に満たない日本においても影響力が大きいと言えます。



聖書の成立は、旧約聖書は、3千年前に前後千年をかけてヘブライ語で書かれ、新約聖書は、2千年前の百年間に書かれました。旧約聖書は、ヘブライ原典として3部24巻でした。しかし、後年になって長編のものを読みやすいように、サムエル記等を上下に分け、ホセアからマラキまでの12小預言者となっていたのを分割するなどして39巻に構成されました。新約聖書は、27巻であります。

旧約聖書で最初に書かれたのは、韻文、詩歌で断片的にでてくるレメクの歌、モーゼの歌等であり、次に歴史物語、さらに王家の物語やエリア、エリシャ物語などが書かれました。モーセ五書といわれる律法

の書は、9世紀頃には出来ており、申命記27章8節で、モーセは「あなたは石の上にこの律法の言葉をすべてはっきりと書き記しなさい」、「律法の書として契約の箱の傍らに置くこと」と命じています。律法書としては紀元前8世紀ごろに纏められ、紀元前444年にエズラの律法公布で認められました。前期の預言書は、バビロン捕囚の時代に、後期の預言書は紀元前5世紀頃に書かれ、紀元前3世紀末から2世紀初め頃に纏められています。諸書については、紀元前1世紀に大部分が集められていましたが、雅歌の取り扱いについては問題になり紀元になって最終的に纏められました。

紀元70年にエルサレム神殿はローマによって破壊され、信仰の拠りどころを聖書に求める必要が生じて、紀元90年のヤムニアの公会議において、聖書をヘブライ語の正典24巻と決めました。そのときの聖書の基準については、律法が中心で、律法を基準にしての良し悪し、預言者的靈感によって書かれたものであるかでした。

聖書の言語は、最初はヘブライ語でしたが、バビロン捕囚など王国の崩壊などでユダヤ人のディアスポラが始まりユダヤ人が地中海全般に分散しました。そしてギリシャ語を好んで話す人々が多くなったため、アレキサンドリアを中心にギリシャ語への翻訳が行われました。ヘブライ語からギリシャ語への翻訳には、70人の学者が関わったことから、70人訳聖書と呼ばれています。その際、律法書には手を付けなかったが、預言書や諸書にはその後優れたものが現れたので、7編を外典として加えました。ラテン語訳は、ギリシャ語訳をそのまま翻訳したので7点の外典がそのまま含まれました。旧約聖書の構成は、律法の書であるモーセ五書、預言書、諸書でしたが、後に、律法(過去)、諸書(現在)、預言書(未来)の配列に改められました。



ローマカトリック教会は、1546年のトレントの公会議で、ギリシャ語訳とラテン語訳に含まれる全ての正典をそのまま認めたので、正典39巻と外典を加えた形で決定しました。プロテスタント教会は、ヘブライ原点のみを正典としたので、旧約聖書は39巻として守られました。1987年に日本では、カトリックとプロテスタントが共同して聖書を翻訳して、新共同訳聖書が出来上がりました。その際、人名や地名等をどうするかを検討のなかで、「イエス」の名をプロテスタントが守り、ペテロは、カトリックが初代法王であることを重要視して「ペトロ」になりました。そのほか沢山の人名や地名などが変わっています。旧約聖書には13の続編が加わり、続編の付いたものと無いものが発行されています。

新約聖書には、イエスの直筆の文書はありません。イエスが文字を書いたかどうかについて唯一の手掛りは、ヨハネによる福音書8章の姦通の女の記事があります。ファリサイ派の人々が石打ちの刑を求めたのに対し、イエスは黙って土に何かを書いて、あなた方のなかで罪を犯したことがない者から石を投げなさいと言ったところ、年長者から帰って行きました。椎名隣三はこの部分を「畏と毒」という小説に取り上げ、イエスは「アガペ」と書いたと推測しています。優れた作家の鋭い推測だと思いました。

イエスの記録については、12人の弟子の集団には、会計はイスカリオテのユダが担当したようですが、書記がいなかったので口伝しかありません。やがて弟子達が世を去るようになり、必要に迫られて、パウロのように各地の教会への指導のための手紙や、イエスの生前の事を見聞きした弟子たちがイエスの生涯を纏めた福音書が書かれました。紀元70年にはローマによってエルサレムの神殿は破壊され、ユダヤ王国が滅ぼされるなど、ローマ帝国によるキリスト教への迫害がますます激しくなります。また、教会観の

違いから異端者が出てきたので、「聖書」をもってこれら迫害や異端に対抗しなければなりませんでした。新約聖書の要件は、使徒によるもの、使徒に関係が深いもの、教会の信仰に反しないもの、使徒的であることでした。

最初の新約聖書の編纂を試みたのはマルキオンで、旧約的なものを極力排除して、ルカ福音書と牧会書簡を除く、パウロの10の手紙をもって新約聖書とするという大胆な試みを行いました。異端として排除され成立しませんでした。しかし、この試みが新約聖書編纂の機運を高めたのです。

新約聖書は、紀元397年のカルタゴで開かれた教会会議で27巻の新約聖書の正典が決定しました。692年には、コンスタンチノーブルでの会議でこれを追認して、最終的に1546年のトレントの公会議で再確認されました。聖書を構成する基準は、使徒又はそれに関係深い著者によるもの、教会の有力な指導者により書かれたものでした。

聖書は、多くの普通の人々が、長い時間をかけて書き、読まれた宗教的な文書で、その中から人々を生かす力があり、信仰の文書として大切なものが最終的に聖書になりました。人間が書いたものでありますが、その過程で教会の信仰、人間の思いを超えて神の働きがあり、聖霊の力があつたと信じられて作られたものです。

聖書の背景を考える時に、和辻哲郎が1935年に発行した、「風土～人間学的考察～」は注目に値します。和辻氏は、そのなかで「聖書の土地すなわち、紅海の沿岸、シナイ山や砂漠は、死そのものを印象するとき風土であり、沙漠は人間の生を拒否する場所である」と言っています。山上の説教は、単純に読むと美しい文章で麗しい自然を想定できますが、そんな過酷な環境の中で、鳥が鳴き、花が咲くことは、これらを生かしてくれる神がいてくださるという信仰を教えているのです。

私の若い頃に、良く読まれた神学者にブルトマンがいます。ブルトマンは、聖書の非神話化という実存神学を打ち立てた人です。彼は、聖書神学の目標は、「再建」と「解釈」であると言います。聖書の時代に立脚して聖書が本来何を意味するかを「再建」し、これが現代の私たちにとって何を意味するかを「解釈」するのが神学だと言うのです。

旧約聖書の内容は、先に述べた通り、ヘブライ正典では、律法、預言者、諸書・文学でした。アレキサンドリア正典は、イスラエルの過去（律法）、現代（諸書）、未来（預言）と変えています。私は、内容に即して4区分、律法（モーセ五書）、歴史（ヨシュア紀からエステル紀）、諸書（ヨブ紀から雅歌）、預言者（イザヤ書からマラキ書）と分類するのが解りやすいと思います。

新約聖書の中で「律法と預言によって」の表現がありますが、これは旧約聖書全体を意味します。

最初のクリスチャンは、旧約聖書をイエス・キリストを指し示すもの、やがて現れる救い主を指し示す書物として考えていました。新約聖書では、四福音書、歴史（使徒言行録）、手紙（ローマの信徒への手紙からユダの手紙まで）、ヨハネ黙示録、に分類されます。

福音書は、イエス・キリストのいわゆる伝記ではありません。キリストの生涯は、33歳位だったと考えられますが、イエスの誕生の記事はマタイ福音書とルカ福音書のみで、ルカ福音書がイエスが12歳の時にエルサレムの神殿に上った記事と、「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」と書くほかは、最後の約2年間が記述されるのみです。イエスの公生涯は、最後の1週間のイエスの十字架と復活が重要な部分であり、福音書はイエスの十字架の死による人類の救いを中心に書かれています。

福音書の順番について、ユダヤ人は重要なものから並べる習慣があり、この順番になりました。しかし、今日では一番古い福音書はマルコ福音書だといわれます。マルコの記事のほとんどがマタイ、ルカにあり、マタイ、ルカにあってマルコにない記事が多いからです。ヨハネ福音書は、3福音書に続いて書かれ、イエスの教えを纏め、信仰の内容を解説する役割があります。そういう意味で、カルヴァンはヨハネ福音書を重視しています。

新約聖書27巻のうち、21巻は手紙であり、パウロを中心に各個教会の指導やキリスト信仰の内容を示

してくれます。また、ギリシャ、ラテンや東方の文化史を知る上で重要な意味をもっています。ヨハネ黙示録は難しく、神の言葉と業を人間に示すのが黙示、啓示であり、イスラエルの預言の思想、ペルシャの世界観やヘレニズムの終末観が入り混じって黙示文学が作られ我々に示されています。

聖書をどのように読むかについては、歴史書、文学書としても読めますし、人生訓、名言の宝庫です。

マルチン・ルターは、1517年10月31日にヴィッテンベルクの城教会の扉に、95か条の提題を掲げました。ローマ教会はそれを討論せずに力でねじ伏せようと再三呼び出し、最後にヴォルムスの国会で審問しました。ルターは、聖書の言葉に、また、私の良心に照らして間違いであることを示されなければ納得しない。我ここに立つ。「神よ我を憐れみ給え」と言いました。数年後に宗教改革は完成しますが、これは単にカトリックを打ち破ったのではなく、根元的には聖書の真理を再発見し、聖書に拠り頼んで信仰に立つ、信仰によってのみ（sola fide）救われるという福音の再発見であったといえます。

ヨハネによる福音書5章の39節40節では、「あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが聖書は、わたしについて証しをするものだ。それなのにあなたたちは、命を得るためにわたしのところに来ようとしない」と言っています。

聖書はイエス・キリストを証する生命の言葉です。聖書を読むことによってイエス・キリストに出会い、生命に触れることが大切です。イエス・キリスト抜きに聖書を読んでも意味がありません。そのように聖書を読むことができる場所は教会です。教会でイエス・キリストに出会うことが大切です。

（文責：玉澤 武之）